

『皆に支えられているということ』

先月、長年お世話になったS教授の退官記念式典のために、久しぶりに金沢の地を踏んだ。大学を離れて、早くも5年の歳月が流れていたが、金沢も駅は拡大工事が行われ、大学周辺も変貌を遂げていた。2日間あまり、懐かしい顔ぶれと楽しいひとときを過ごすことができ、最近ホッとする時間が少なかった自分にとっては、この上ないリフレッシュの時間となった。振り返ると、S教授についての思い出はいっぱいあるが、学んだことも実に多い。そして、今でもそれを忘れずに歩んでいる自分がここにいる。

『継続こそ力なり』。どんなに忙しくとも、何があっても、先生は一度始めたことは、簡単な理由でそれを止めてしまうことはなかった。とにかく継続すればこそ、一歩でも前進し、意義があるのだと。

次に『謙虚であれ』。常日頃から“臨床は愛”と言われていたように、難病と言われていた膠原病を持つ患者に対して、いつも同じ目線で接し、共に闘うという姿勢を崩さなかった。超多忙にも関わらず、常に穏やかな表情で、丁寧に説明をしていた。また、スタッフに対しても、研修医にさえ、敬意を払って接してくださった。

最後に『夢を追うひた向きさ』とでも言おうか。先生は“研究は夢”と言われ、実際に多くの研究成果を挙げられたが、その背景には並々ならぬ努力があったはずである。毎日のように、夕食をとってから、また大学に戻り、誰よりも夜遅くまで仕事をされる先生の姿は、今でも目に焼きついている。“ホスピスをやりたい。”と突如と大学を去ろうとした私を、温かく送り出してくださったS教授の無言の教えは、今も私の中に息づいているのである。



金沢では医局のOB・OGの先生や研究室のスタッフはもちろん、愛すべき別館6階のナースたちとも再会した。今は各場所で活躍している彼女らとは、血液疾患を持つ患者を診療していく上で、多くの苦楽を共にした、いわば同志である。若い方の死と向き合うことも多く、また骨髄移植という厳密な治療の現場においても、いつも笑顔を絶やさず、また誠意を持って看護に当たっていた。

私は今、ホスピスを準備中であるが、別館6階のナースたちは、当時からホスピス精神を実践していたのだと振り返って確かに思う。常に患者だけでなく家族の気持ちまで考え、時には私たちドクターにその思いをぶつけながら、いつも全力投球であった。

ある時、あるドクターが、急変して亡くなられた患者の遺族に、「原因がはっきりしないから、病理解剖をして死因を明確にしないと、死亡診断書は絶対に書けない！」と言い放っていた。「これ以上、身体を傷つけない。」と泣き叫びながら断る家族と延々と押し問答をしながら、結果的に解剖は為されることはなかったが、ナースたちは家族と同様に、目を腫らしながら、「こんなのはおかしい！」と悔しさを噛み締めていた。そのドクターがあとでバツの悪そうな顔をして、ナースたちに「ご苦労さん。」と言ってアイスクリームをふるまっていたが、彼女たちは決してそれに手をつけなかった。



いつも患者や家族と同じ目線で看護にあたっていた彼女らにはそのドクターの態度は許せなかったし、そう思うだけの信念とプライドがあったのである。こんな一つのエピソードからも言えるように、別館6階ナースたちは、看護の原点を身を持って我々に教えてくれていたのである。

S教授、別館6階のナース、研究室や検査室のスタッフ、などなど本当に多くの方たちと一緒に仕事をしてきた。この環境で、この人たちと一緒に仕事をしていなければ、今の自分は無いとも言える。それだけ、私にとって大学という職場は誇りを持って働ける場所であった。

今回、懐かしい顔を見て、何年も会っていないのに、まだ一緒に仕事をしているような錯覚に陥るほど、互いの距離は感じなかった。そう考えると、これまで皆に支えられてきたからこそ今の自分がいて、今もなお皆に支えられている、と素直に思えるし、その事に感謝の気持ちで一杯であった。久しぶりの金沢での夜はやけに酒が進んでいた。